

東京、2001年9月17日

今日はピエール、

音達は不器用に僕の鼓膜をたたいては、外に徘徊しに行ってしまうていた。まるで空の瓶から遠ざかってゆく酔っ払いのように。それらの音が少しずつ言葉に変わってきた。

日本語は僕の所まで、長い道のりをやって来た。今までは推測するにすぎなかった文章の意味内容が脈々と、まだ中身の空っぽだった記号に過ぎなかったものから流れ出した。

しかし推し測ることほど美しいものはない。学ぶことは、とどのつまりおぞましい。今までは推し測るに過ぎなかったことを征服する、それは花の薫りを思い描くこともせず、いきなり花の匂いを「かいで」しまうことに等しい。それはとりもなおさず、薫りを手に入れるには犯さずにはできないということ。

ただ、思い描くためには最低限の知識は必要ではないか。かといって「知り」過ぎていては推し測ることはできない。薫りにうっとりせずに、薫りを思い描くだけではしかしそれが一瞬のことであるにしても、犯罪ではないか？

そして犯すことは、美を新たに汚す可能性を枯らしてしまうことではないか？そして経験、生きてきた事のつぶやき、芸術のあらゆる表象と真実の本質については何がいえるだろうか？

だからこそ、花であれ、言語であれ、推測の域にまで押し進み、思い描くことの軽妙さを大いに楽しみ、絶望しながらもその大義を手に入れ、それを窒息させなければならぬのかもしれない。

芸術が言えること。言わなければならないこと。どうやって、こんなにわずかな静寂の中で生きていけるだろう。

返事待っています。

エリック